

『風に紅葉』物語の完結性について：覚書(三)

辛島，正雄
九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/10497>

出版情報：文献探究. 11, pp.14-24, 1983-03-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『風に紅葉』物語の完結性について

— 覚書(三) —

辛島正雄

はしがき

『風に紅葉』物語は、『無名草子』や『風葉和歌集』に所見がなく、また、題号自体、巻一起筆の一文に拠ってなされた仮りのものであって、よしんば本来の題号が中世以降の記録類にとどめられていたとしても、それと知るよしもなく、成立や伝来・原初形態等を外部徴証から跡づけることは、まず不可能である。ただ、宮内庁書陵部所蔵の孤本が室町末頃の書写になるものといわれ、近世の偽作^①でないことは明らかである。

かかる次第で、本物語には、作品研究にあたって、さまざまの不安がつきまとうことになる。

たとえば、題号が不明だということは、本物語の成立がどう早くに見積っても新古今以後^②でしかありえないことを考えると、『源氏物語』以後、物語の題号が、それまでの即物的なものから、優美なひびきをもった、和歌の一節や歌語から出る主題暗示(もしくは象徴)型のものが多くを占めるようになり、作者自らその命名に並々ならぬ神経を用いているらしいことからすれば、題号の分析により作品の基底にかなり深く切り込むことが可能なのであるから、本物語の場合、作者が事前にまずは読者のイマジネーションを喚起すべ

く提示していたはずのキイ・ワードともいうべきものが脱していることになるのである。

また、現存二巻が原態をどの程度保っているかということも、気になる問題である。『夜の寢覚』や『浜松中納言物語』が好例だが、作品評価はある程度定着しても、關卷の存在により作品総体としての把握にどうしても不分明な点が残ってしまうことを思うと、完本か否かということは、慎重に検討しておく必要がある。

さて、本物語の原題号についてはまず究明の見込みは立たないが、原態の保存状況に関しては、作品構造を見定めた上で、欠脱の有無結末としての可否等を丹念に検証してゆけば、ある程度の共通理解に導くことは可能だと思われる。以下、本稿では、本物語の完結性もしくは未完性について、先学に導かれつつ愚考をめぐらしてみることにする。

1

本物語巻二の結末については、全体のどいめとして是不十分の見た目で、諸説^③一致している。いま、その根拠を、従来の説を総合し新見をも加えられた樋口芳麻呂氏の論で代表させれば、次の四件となる(①～④は私につけた番号である)。

①式部卿宮の姫君との交渉はまだ緒についたばかりで、その進展は今後にゆだねられていること

②主人公は右大将を自ら導いて妻の一品宮と契りを結ばせ、一品宮の出産、死去という重大な事態をひきおこすが、そのような不可解な行動に出た主人公の心理について、巻二ではまだ充分な説明が与えられていないこと

③一品宮の死は、暗い出生の秘密を背負った若君を物語に登場させる必要から設定されたのであろうが、若君はまだ乳児の段階にとどまっています、作者の意図が未開花であること

④主人公が出家もせず中途半端な状態で終っていること
さらに樋口氏は、これらから、「作者は物語の第三巻以下を書き継ぐ意図をもって巻二を結んだかと推測され」、「とにかく現存二巻だけでは、物語はなお未完成の感が深い」と結論づけられたのであるが、筆者としては首肯しがたい点も多いので、以下、逐次検討してみたい。

①について――

樋口氏だけでなく、小木喬氏もこの一件から未完結かと疑っておられる。すなわち、「もし現存の二巻以上あったとしても、おそらく、大部なものではなかったであろう」と推測され、その根拠を、構想も行き詰って、残るところは、悲恋の女主人公式部卿宮の

中君が、どうなるかということだけである。
と説かれたのであった。しかし、ここには根本的な読み誤りがあるのであって、認められない。この点についてはすでに拙稿「『風に

紅葉』物語覚書(一)」(本誌8号 昭56・6)に述べたところであるので詳細はそちらに譲るが、主人公が夢に式部卿宮の姫君はもはやこの世の人ではないと見るくだりがあり、姫君亡き以上、これから先ふたりの関係の進展しようはずもないのである。したがって、この一件は未完結説の根拠たりえず、とすれば、小木説も一応完結したものとして見ていることになる。

②について――

「不可解な行動に出た主人公の心理について」「充分な説明が与えられなければ物語は終わらないのか、と逆に問うことも可能であろう。しかし、これでは水掛け論になってしまうので、別の方向から考えてみる必要がある。

もともと本物語には、最初からいちじるしく心理追求の姿勢に乏しいということがある。『源氏物語』以来、登場人物の心理のひだを丹念になぞってゆくのは、物語のお家芸ともいえるが、一方で中世に入ってくると、歴史物語風の叙述中心の作風が幅をきかせるようになり、作者が作中人物と一緒に立ちどまり、じつと心の奥底をのぞきこむようなことはしなくなる。本物語には、そのような中世物語の一般傾向が如実に現われているといつてよい。したがって、巻二からさらにすすんで主人公の動機・苦悩・後悔といったものをこと細かに掘り下げてゆくとはいえない。むしろそれ以前に、「充分な説明が与えられていない」と感じるのも今日的な感覚からしての話で、作者としては「不可解な行動に出た」理由は説明したつもりなのではないか、とも思われる。

問題の主人公が宰相中将を一品の宮に導く条は、次のように描かれてあつた。

(宰相中将ハ) よるひる、 たゞうちのをとゞ(主人公)の御あたりを
はなれ給はず、二夜をきの御まかなひなどまでし給て、いづく
ともなくまろびふしつゝ、御をこなひはてゝは、やがてもろと
もに御そばにてのみあかし給を、うちのをとゞは、宮(一品ノ宮)
の御ひとりねをまめやかに心がるしうおぼして、「なにかくる
しらん(「苦しからん」ノ脱ナラン)。はらは(童)にてのまゝに、あの御
そばにね給え」との給はずれど、「けしからず」とき、いれ給
はぬを、まめやかに、まことしう、さまぐの給つゝ、とかく
みちびき給に、さうでだにしたやすからずもへわたる御心のす
ゑ、うしろめたかりぬべきを、かくまかなひきこゑ給はむに、
さばかりあらむやは。これものがれざりける御ちぎりにこそは。

(一九七〜一九八)

主人公は、聖から、近く身にふりかかる難をのがれるため、身を
慎み加行に専心するよう言われ、忠実に実行していた。しかし、愛
する妻一品の宮とはしばしも離れて暮らすことはできず、夜の床は
別々ながら、同じ邸に起居することにした。ところが、自分は同性
愛関係の宰相中将とふたりで夜を過すのに、一品の宮だけ「ひとり
寝」の続くのが気の毒で、宰相中将は元服するまで自分と宮との間
にやすませてかわいがっていたことでもあり、昔のように宮のそば
で寝かせて、自分が一緒にいてやれない慰めに、と考えたわけであ
る。だが、もはや以前のままの少年ではない宰相中将は、おのずと

宮と通じてしまうことになつた。

「宮の御ひとり寝をまめやかに心苦しう思して」——これが主人公
が宰相中将を一品の宮に導いた理由であることは明白であり、とく
にこれ以上説明の要もないのではなからうか。主人公としては、ふ
たりをことさら不倫関係に結ばせようと企図したわけでもあるまい
ことは、「さうでだに下やすからず燃えわたる御心の末、うしろめ
たかりぬべきを……」という草子地から察することができる。これ
を、心ひそかにはふたりを結ばせたかつたのだ、などと深読みして
ゆくのは、すでに作者のあずかり知らぬところであつて、文章はそ
うしたことを想像させるかもしれない曖昧性(これは人間心理——
自分の心も、また他人の心も——の不可解性とも一脈通ずるであろ
う)で提示されているばかりである。

主人公はすぐにふたりの関係を知るが、宮が大きな衝撃を受け、
宰相中将も心を乱して茫然としてゐるのに対して、ひとり冷静に事
を見、その後ふたりの仲を執りもつ。その間、宮も宰相中将もつ
らい気持で沈んでいるのに、彼だけは、

これもさるべき前世のことにこそはあらめ、われゆるさずはか
たみにあるべき事ならねば、とあはれにおぼえ給。(一九九)

と、人の縁の不思議に感慨を催している、といった態である。市古
貞次氏は、このあたりからの一連の主人公の心理が、「頗る異様で
あつて、そこには心理描写の不足もあるうと思われるが、描かれて
いる限りでは、何としても今日の常識では考え難い所であるといわ
ねばならない」と述べられた。たしかにここに至つては、どうてい

尋常の心理・行動とは言いがたいのであるが、さりとて「今日の常識では考え難い所」が描かれているからといって、そのこと自体が直接に非難の的となるべきいわれは毫もないし、異常を異常として描こうとしているとすれば、納得のゆく説明を期待する方が無理というものではなからうか。ただ、作者がどの程度自覚的に主人公の人間性を見据えていたのかということになると、はなはだおぼつかないのであり、「心理描写の不足」も否めないところであるが、基本的には主人公が謎めいた行動を不可解な心理からおこしたとも考えていないように思われる。結局、作者としては、その場その場でのべきことは一応尽くしているのであって、懸案を残すような叙法はとっていないと見てよいのではあるまいか。

以上から、やや決定力に欠けるが、この一件をもって巻二以降の展開を予想することは無理であろうと考える。

③ について――

これは、基本的な見かたに問題がある。たしかに一品の宮所生の男児を主人公に新たな物語を開いてゆくことは可能である。それはあたかも『源氏物語』前篇と後篇との関係にも似る。しかし、「一品宮の死は、暗い出生の秘密を背負った若君を物語に登場させる必要から設定された」との見かたは、現存二巻で何を描こうとしているのかを正しく捉えていないための、主客顛倒の見解といわざるをえない。あえてそのようなかたちに倣うなら、へ一品の宮を殺すために若君の誕生を設定したとでもした方が、よほど物語の實際に即していると思われる。少し詳しく見てみよう。

一品の宮は当帝と中宮との間の娘で、主人公元服の翌年に降嫁した。夫婦仲はきわめて円満で、すぐに女兒にも恵まれ、主人公も少しの隠しだてもせず、彼女ひとりにも真実の愛を注いでいた。その後主人公は、異母兄の遺子を見出し、手もとでかわいがるようになったが、妻一品の宮とも隔てなく馴れ親しむようにさせた。ところで、ここに注意すべき草子地が見える。

ついのはて、いかゞあらん。れいのさ(ママ)しかるらん。(二六八)
若君を宮のそばに近づけることに対して、へこんなことをしている、と、しまいにはどうなることやら」と批評を挿し挟んだものである。これと同趣の意義を担う文章は巻一巻末にも見える。

(主人公)「若君が」なに事をふるまひたらんに、心づきなしと思ひてん。いろこのみたて、思ひよらぬくまなくふるまへよ」
などいひいたまえれば、「かくをしへきこゑさせ給はんに、まことにこの事あらじ。あまりなる事はさてしもはてぬならひにて、御中やあしからん」など、中つかさきこゆれば、「さる事あるまじ。心やうもまめやかに、まことしうよき物にて侍ぞ。いま御らむぜよ」など、あいし入てぐし返給ぬ。(二七三)

若君に対する主人公のあまりのあまやかしぶりに、中務の乳母が、へこの子をわがままいっぱいで大人にしてしまうと、ひいてはあなたか夫婦にとつても具合の悪いことになりすよ」と咎めたのであるが、主人公はいっこう意に介しない。この二箇所は、次巻への興味を唆る――具体的には、若君がからんで、これまで水も漏らさぬ仲であった主人公と一品の宮との間に何かがおこるのであらうと予

想させるための、いわば伏線となつてゐるわけである。

主人公は、唐土帰りの聖から、やがてその身に大きな災いの訪れるであろうことを警告される。数年後、再び主人公の前に現われた聖は、来年が慎みの年であり、命は助かるが、大きな嘆きなどがあるろう、と予告し、くれぐれも加行を怠らぬよう指示する。それ以来主人公は加行三昧の生活に入るが、その間一品の宮にひとり寝の続くのを心苦しく思い、すでに元服し一人前になつた若君(宰相中将)に身代りのような役を勤めさせることになる。その結果、ふたりは肉体関係に及んでしまい、一品の宮は、このような状況に自らの手で導いた夫を恨みながらも身籠つてしまう。ここに、巻一でそれとなく予感された不幸が、最悪のかたちで実現してしまつたのである。身重の一品の宮の容態はすぐれず、出産時が心配されたが、無事男児を出産した。しかし、皆がもう大丈夫と安心したのもつかのま、宮はにわかに胸をせきあげ、息絶えてしまう。「いま一ど、めをだにみあはせ給へ」(二〇四)との主人公の願いもむなしく、宮は帰らぬ人となつてしまつた。

このように見てくると、一品の宮の死は、物語全体の構想の中にしつかり組み込まれていて、重大な位置を占めるものであることが感得されるであろう。宮の死以後、主人公はいよいよ仏道に傾斜してゆき、官職も返上することになる。

もつとも、一品の宮の死が罪の子を登場させる必要から設定されるような底のものでないことは以上から動かないとしても、次の世代の物語へと展開する可能性が依然として消えるわけではないこと、

前述のとおりである。しかし、よしんばその忘れ形見を中心とする物語世界が開けていたとしても、現存二巻でのひとまずの完結性は認められるべきであろう。

④ について

樋口氏は「中途半端な状態」とされるが、一品の宮を喪つた主人公は、故人の冥福を祈りつつ、自らも俗世との関わりを断つべくますますすすんでいること、疑いない。忌み明けに父関白から故帥宮の姫君を夜伽にと勧められても、断乎として拒否しているし、仏道修行に専心するため、周囲の猛反対を押し切つて官職を辞していること、上述のとおりである。巻二巻末、故帥宮の姫君を按察使大納言に奪われた大将(もと宰相中将)が相談を持ちかけた時も、忍んで情を交すようなことをしてはいけな、と諫めている。このように、⁴⁾姿こそ在俗のままであるが、ほとんど迷いの心も去つたかのごとくで、やがては出家を果すものと推量されるのであり、この段階で擱筆されたとしても、何らあやしむに足りまい。

以上、樋口氏が本物語を「未完成」と考えられる根拠四件を検討し、ことごとく未完結を唱える論拠としては不十分であることを証し得たのであるが、以下さらにすすんで、現存二巻での完結性を積極的に認める立場から私見を述べてみたい。

2

まず、全篇の構想について考えてみることにする。

本物語は、関白と女一宮との間の子で、二位中将→中納言兼

右大将→内大臣と昇進し、二十一歳で官職を辞し、前内大臣として終わるひとりの男が主人公として描かれる作品である。彼の半生の素描をこころみれば、才色兼備の呼び声高く、女たちの憧れの的であるが、妻一品の宮を深く愛し、夫婦仲は円満である、また一人の子息として順調に栄達の道を歩んでいた、しかし、やがて一品の宮が男児出産後あつげなく世を去り、世の無常を思い知らされた彼は出家の意志を固める——ほぼこういったところになろう。

こうした本物語の構想について、市古氏は、

鎌倉時代には恋愛に失敗して遁世するという型の物語が「石清水物語」をはじめとして多く出ていたが、そのようないわゆる悲恋遁世物とはやや事情を異にしているにしても、主人公の仏道帰依を以て結ぶ所は、類似の構想であつて、やはり他の物語と同様に、仏教思想の浸潤があらわであるとはいえるであらう。と述べられているが、これにはやや問題がある。右の認定法でゆけば、『源氏物語』前篇までもがそこに含まれてしまうことになりかねないのである。これに対して、近時安藤亨⁽⁵⁾氏が、本物語二巻は「主に『源氏物語』正篇を骨子として描いたものであり、「宮の死後の主人公像は幻巻の光源氏の透き写しのよう」で、一品の宮が宰相中将の胤の男児を出産し死ぬのには「女三宮の盛通事件と紫上の死との変型が考えられるだろう」とされたのは、まさに言われるとおりであらう。そして、

この続篇があつたとしても、この二巻で一応の区切りをつけているとはいえるだろう。

とされたのも、妥当である。結局、本物語の基本構想は、中世に盛行した出家遁世譚のパターンをくぐり抜けながらも、直接には『源氏物語』前篇のかたちを襲つたものであり、現存二巻に一貫する主人公の物語である限りにおいて、これ以上の進展を予想させる何ものもない、ということになる。

ところで、こうした物語の構想上のスプリングボードともいべきものに、唐土帰りの聖による予言がある。

主人公十七歳の時、妹の宣耀殿(春宮妃)が懐妊する。容態はおもわしくなく、さまざまの祈禱も効果がないので、難波で修行をしている高德の聖を招聘することになった。聖は快く京にやって来て加持を行ったところ、ほどなく宣耀殿は快方に向かい、無事男皇子が誕生した。聖はなお三日ほど加持を続け、主人公に、これから四・五年の間に大きな災いが訪れるであろうことを警告し、その時に再び参上することを約する手紙を残して、禄にも手をつけず、いざこともなく修行に発つた。——三年後、聖は約束どおり再び訪れ、来年が主人公の重大な災いの年だとあらためて警告、命は助かるが大きな嘆きがあるだろうから、油断なく加行に励むようにと奨めた。このような予言は、やがて一品の宮の死というかたちで実現し、主人公の在俗の人生は終焉をむかえることになる。

また、最初の予言の前後は、物語の展開の上で大きな転換点となっている。それは、主人公が住吉に聖を訪ねた折、「やしろのやうくわん」から、異母兄故中納言の忘れ形見の若君を託されたことである。この若君は子細あつて女装をしているのであるが、主人公は

その美しさにすつかり魅了され、その溺愛ぶりたるや、夫婦の夜の床にまで放さず側においておくほどである。こうした関係の果てがやがて一品の宮の懷妊↓出産↓死というかたちで破局をむかえることは、前述のとおりである。いわば物語が本格的に動き出すのが、この若君の登場以降ということになる。それ以前は、主人公と幾人かの人妻との、さほど燃え上がるわけでもない、遊びにも似た交渉が描かれるだけで、それぞれの話柄のおもしろみも乏しく、「主人公のすぐれていることを示すためになされている」（市古氏）のであろうが、やや平板・退屈の感をまぬかれない。それが、若君の登場により、緊張した複雑な人間模様へと急テンポで展開しはじめ、一品の宮の死で一氣に決着を見ると、後はまた發展性のないかたちで物語は終息するのである。

3

次に、一品の宮歿後の主人公の描かれかたから考えてみたい。先に引用した安藤氏の言にすでに的確に指摘されていたところであるが、「宮の死後の主人公像は幻巻の光源氏の透き写しのよう」である。それは、あらゆる模倣というほどのものではないが、日教の過ぎてゆくなかに、故人を偲び、その冥福を祈りながら、自らの出家への決意を固めてゆくさまが、哀傷の和歌をつらねて淡々と綴られる、その手法そのものに、紫の上亡き後の一年を描いた「幻」巻のそれと近似したものが感じられるのである。以下に、そうした実例をいくつか、時間の推移にしたがって示しておこう。

●まいてうちのをとゞ(II主人公)は、時しもあれ、あきのすゑばのかぜのをと・むしのね、物ごとになみだをもよをしつゝ、「我ながら、かばかりまでほれまどひ、いふかひなかるべきか。さるは、ゝじめて身にきたれるなげき、よのならひなどもおもはぬ物を、かくやはよはゝしかるべき」と思ひさまし給につけて、

「月をだにふくるまでやはながめしに
ねぬよなゝのつもりぬるかな

せんかに古人おほし」とひとりごちて、はなうちかみ給御けしき、かゝらん人になげかれてしなんいのちこそをしからね、と思ふ人ゝおほかり。
(二〇六)

●冬のはじめになりぬる日、中宮(妹)の御かたより、

わかれにしあきさへくれていかばかり
なみだのつゆにしがれそふらん

この事思ひいできこゑ給ばかりぞ、この世にとまる心ちして、なみだもいとゞながしそえ給。

かきくらす袖のしぐれのたへまには
くも井のそらをながめやりつゝ

(二〇七)

●よの中には五せちなどいひてまひそぼるゝも、院・うち・殿をばじ(〇)たてまつりて、ひかりなうものうげなるとしなり。身づからは、かんきよをしめたる御すまい、ゝとおもふさまにおぼしつゝ、いまだ又けぎやうはじめ給。さきに心ぼやげにおぼいたりし(二品宮)御けしき、よろづかきつらねおぼしつゝけら

れて、

なみこゆとつらみし物をみつせがは

いかなる水にそでぬらすらん (二六〇二七)

●としも返ぬ。こぞは(二品宮)とこをならべてありしほど、たゞいまのやうに。

ふりにけるなみだはけふもかはらぬど

時しりがほにはるはきにけり (二一八)

こうした手法をとること自体に、おそらくは、物語を語りおさめようとの作者の意図が反映しているのであろう。

また、主人公の述懐ともいべき、

「なげきにかはるべし」とき、しいのちなればにや、けふまではうれしげもなく、あるにもあらず、かなしき事のきはめは身一にいできそめたる心ちこそすれと、よろづをおぼしつづくるには、云々 (二二一)

といった一節にも、

いにしへより御身のありさま思しつづくるに、「鏡に見ゆる影をはじめ、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに來し方行く方も例あらじとおぼゆる悲しきを見つるかな。(以下略) (「御法」卷・四九)

のごとき光源氏の述懐が微妙に影を落としているように思われるのであり、一品の宮の死以後の本物語の表現は、形式・内容ともに、まったく『源氏物語』前篇の結末部たる「御法」「幻」両巻を踏襲

したものであること、疑いを容れないように思われる。

4

最後に、主人公とそれをめぐる女たちとの関係が、巻二巻末においてどのようなふうになっているか、確認しておきたい。それは、男と女の恋愛模様が作品の興味の中心から後退してしまつては、およそ當時の物語としては成り立ちえないと思われるからである。

太政大臣の北の方・梅壺女御(後、中宮から皇后宮)・承香殿女御の三人は、巻一前半で主人公が次々と関係をもつた女たちであるが、いずれも人妻で、主人公よりかなり年上、しかも女の側からの働きかけによるものである。このうち、太政大臣の北の方とはなお折にふれて逢瀬があるが、ふたりの女御はどちらもあり美しくもなく、主人公も心惹かれない。この女たちとは、巻二、主人公が聖の警告にしたがつて加行三昧の生活に入らうとする時、事前に訪ねて暇乞いをしている。いま、承香殿への言葉によれば、

このよに侍らん事も、むげにのこりすくなきやうに申きかする物々侍につきて、しばしこもり侍てをこなひ侍べきいとま申になん。おほかたよのあぢきなき、これをかぎりにてちや。

(一九四)

ということ、その後主人公には愛妻一品の宮の死という悲しみが襲い、女たちとは「これをかぎりにてちや」とのことばどおり、まったく途絶えたかたちになっている。

次に、主人公の憧れで、事につけて一品の宮に冗談めかして手引

きを頼んでいた叔母の皇太后宮（はじめ中宮。皇太后宮を経て皇太后宮）も、娘一品の宮の死を悼んで落飾（女院と称す）、完全に主人公の手の届かぬ存在となりはてている。

また、一品の宮の忌み明けに父閑白から夜伽にと勧められた故帥宮の姫君には、その哀れな境遇に同情こそすれ、色めいた心はまったく動かず、

くさがれにしほるゝわが身ながらへば

めぐりもあはん冬の夜の月

(二二〇)

と、よるべない姫君に対して、もしも自分が無事生き永らえたなら、またお目にかかることもありましょう、と慰めている。その後、主人公の代理役のごとき右大将（もと宰相中将）がこの姫君と深い仲となるが、結局は按察使大納言の手に帰することとなった。

このように見ると、主人公と関わりがあった女たちは、ことごとく巻二巻末において主人公とは絶縁状態になっていることが知られ、恋愛物語としての本物語には、これ以上の展開を可能ならしめる何ものも残されていない、とせねばならない。

むすび

以上、かなり煩瑣な詮索に終始した感があるが、本物語が一貫して主人公の人生の軌跡を描こうとしたものと見る限りにおいて、ひとつのまとまりをもつて、現存巻二巻末で閉じられている、と判断してよいように思われる。したがって、こうした見地に立つ以上、市古氏が、「最後はとりとめがなく、結びとしては頗る物足りない」

とされるがごとき見解には、容易に従えないのである。巻二巻末最後のエピソード——我がものにしたとばかり思っていた故帥宮の姫君を按察使大納言に奪われてしまった大将が、姫君が自分の胤を宿したということを知り、放っておけぬ気がして主人公に相談したところ、大納言は事情を承知で姫君を大切にしているのだから、こっせりと情を通わすようなことをしてはいけない、との答えで、大将は「こせくとおぼしたへにけり」(二二〇)という結末は、一部前にもふれたが、主人公の行き着いた境地とでもいうものを示すかのようであり、また、大将の女性関係についても、室である太政大臣の小姫君がひとりいるばかり、さらに故帥宮の姫君の処遇も決したということ、曲折を経てここに到った物語世界も、すべての運動が停止し、まさに終局を迎えたとの感が深い。それは、「とりとめがな」いどころか、物語を語りおさめようとの意図のもとに、十分計算された結末とこそ見るべきであろう。

ついでをもつて言えば、中世物語に対する研究者の評は、全般に辛みにすぎない感少なしとしない。しかもそれが、必ずしも十分な読解の基礎の上に立つたものとは思えない場合が往々にして見受けられるのは、問題である。市古氏が本物語を現存二巻で完結しているのではないかと推定されるのも、結論的には筆者と同じになるものに、結末を右のごとくに捉えた上で、「ほかの鎌倉期の物語と同様に、作者の構成力の不足を露わしたものの、分裂的傾向を示したものと、考えるべきであろう」から完結と見做されるのであって、根本的な作品理解はほとんど正反対になっているのである。ここには、

中世物語といえ、ただちに、古典の切り継ぎを事とし、作品としての一貫性・統一性に乏しい、といった評価に結びつけがちの、所謂通説を、無造作に適用しようとする弊があらわれているように思われる。事実、氏がとりとめのない結末の物語の例として『我身にたどる姫君』を挙げ、「主人公の出家後に、主筋とほとんど関係の無いことが、何くれとなく書きつらねられている」とされるがごときも、近年の同物語の研究によって改められねばならないのである。結局、何よりも個々の作品の精査な解説の急務であることが痛感されるのであり、それさえ着実になされれば、十把ひとからげに扱われてきた作品群から、新たな面目とともに再評価の俎上にのぼせらるべきものも、一・二にとどまらずあらわれるに相違ない。

ところで、いま右に、「本物語が一貫して主人公の人生の軌跡を描こうとしたものと見る限りにおいて」完結していると認めてよからう、との筆者の結論を述べたわけだが、こうしたただい書きをつけたのは、前述のごとく、一品の宮と大将との間に生まれた罪の子を中心に据えた次代の物語世界が開けてくることも、理屈の上からは十分にありうるからである。しかし、このただし書きも、あるいは不要かと思われる。それは、巻一巻頭の序文に立ち帰れば、おのほと明かになる。ここでは、語り手である老人の前口上として、昔見聞したことなどを「とはずがたり」したい心境でいるのだが、その中に、なべて物がたりなどにいひつづけたる人にはかはりて、えんにいみじうもあらず、なみのさはぎにかせしづかならぬよのことはりを思ひしるかすれど、それもち返がちに、

よろづにつけて心えぬ人のうへをぞ、あむじいだしたる。

(一四三)

として、「よろづにつけて心得ぬ人の上」を語るのだと、はつきりいつているからである。これは当然ある特定のひとり身のの上をいうのであるから、何代かに亘る物語の構想は、最初から作者の念頭にはなかつたというべきであらう。

(一九八二年三月稿・一九八三年一月補訂)

〔注〕

(1) 今日ふつうには中世物語に分類されている作品にも、『松蔭中納言物語』や『別本八重律』のように、近世の偽作ではないかとの疑いのもたれているものもある。

(2) 卷二「はかなかりし春の夜のゆめのうきはしの、ありへば思ひあはするひまもやとたのまれしを、やがてとだへはてぬるちぎりのあえなさ」(二〇六)は、定家の著名な「春の夜の夢の浮橋とだえて峯にわかるる横雲の空」(『新古今集』春上)に拠るものであること、一目瞭然であり、また、卷一「さてもむめつばは、御心もそらに、たよりのみまぢ給に、はなのかたみ恋しきゆかりの色のふぢなみさきかゝりて、えんなるゆふべのほど、ほのめき給へり」(二五五)は、道助法親王(後鳥羽天皇第二皇子)の「花散りてかたみ恋しきわが宿にゆかりの色の池の藤波」(『新勅撰集』春下)を踏まえたものである(いずれも樋口芳麻呂氏の御指摘がある)。

(3) 市古貞次「『かぜに紅葉』について」(『史学文学』2巻2

号 昭34・5。のち『中世小説とその周辺』(昭56)再録)、
小木喬「風に紅葉物語(春日山)」(『鎌倉時代物語の研究』(昭
36)所収)、樋口芳麻呂「かぜに紅葉の典拠について」(『愛
知大学国文学』8号 昭41・12)。本論中言及した三氏の所説
は、すべて右記論文による。

(4) もつとも、市古氏は、主人公の「仏門への入り方が、はなは
だ煮え切らないものであ」とされるのであるが、潔く出家し
てしまわないから優柔不断だと決めつけるのも一方的だと思わ
れる。「父親の心事を思い、思い切つて山へ入つてしまふこと
もできない」のは言われるとおりであるが、その一方で上に述
べたような出家への意志を堅持している点をも認めるべきであ
る。出家遁世譚一色に塗りつぶされる観さへあり、即身成仏の
場面をもつ『海人の刈藻』や『しづくに濁る』のごとき作品ま
でも生み出した中世物語の中にあつては、本物語末尾の主人公
の姿は、「かえつて珍しい存在」(安藤亨子氏)といえる。

(5) 「風に紅葉・春日山」(「解釈と鑑賞」昭56・11)。

(6) 「長夜君先去、残年我幾何、秋風襟満涙、泉下故人多」(『和
漢朗詠集』巻下・懐旧・白。樋口氏に指摘あり)。

(7) 参考「冷泉院の後の宮(秋好中宮)よりも、あはれなる御消息絶
えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、

『枯れはつる野辺をうしとや亡き人の

秋に心をとどめざりけん

今なんことわり知られはべりぬる』とありけるを、ものおぼえ

ぬ御心にも、うち返し、置きがたく見たまふ。言ふかひありを
かしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおはしけれと、い
ささかのもの紛るるやうに思しつづくるにも涙のこぼるるを、
袖のいとまなく、え書きやりたまはず。

のぼりにし雲ながらもかへり見よ

われあきはてぬ常ならぬ世に

おし包みたまひても、とばかりうちながめておはず」(「御法」
巻・五〇三。「源氏物語」の引用は「日本古典文学全集」本に拠
る)。

(8) 参考「五節などいひて、世の中そこはかとなくいまめかしげ
なるころ、大将殿の君たち、童殿上したまひて参りたまへり。

(中略) 思ふことなげなるさまどもを見たまふに、いにしへあや
しかりし日蔭のをり、さすがに思し出でらるべし。

みや人は豊の明にいそぐ今日

ひかげもしらで暮らしつるかな」(「幻」巻・五三二)。

(9) 市古氏が、主人公の妹が「後の位をすてて女院になつた」と
するのは誤り。小木説が正しい。

(10) 徳満澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』(昭55) 解題、拙
稿「『我身にたどる姫君』の一面——ある女系の「年代記」——」(『今
井源衛教授追悼官記念文学論叢』(昭57)所収)等。

——九州大学文学部助手——